令和４年度 日本大学文理学部付置研究所　所員個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　ドイツ文学科・准教授

申請者氏名　　横山　淳子

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>ドイツ三月革命期の諷刺詩</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>ドイツ三月革命の前後、自由な言論や出版が厳しく規制された時代に出回った「風刺詩」を考察する。抑圧された時代、社会の問題点を浮き上がらせ、人々の心を動かし、社会を新たな方向に動かす原動力となったのが「風刺詩」だった。人々の不満、怒り、願望、諦念がどの様に表現され、困難を乗り越える力となり得たのかを究明する。
三月革命の翌年 1849 年に出版された『ドイツの手回しオルガンのミューズの響き』は、当時の政治、社会、宗教を「ユーモア」や「嘲笑」を交えた独特な表現で風刺し、「歴史ドキュメント」と言われて人気を博した。本研究では、この詩集を考察対象とし、風刺詩と社会変革の関わりを検証する。まずは所収されている 34 編の詩を読み、政治、宗教、道徳観、恋愛、事件などのテーマごとに分類したうえで、いくつかのテーマに考察対象を絞る。そのテーマについて、何が問題視されており、人々は何を考え、どのように表現していたのかを考察する。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>『ミューズの響き』の中から、殺人や死をテーマとする詩を考察した。何ゆえに殺人物語が生まれ、殺人や死が何を表現しているのか、また、ベンケルリートの形式によって、社会に何を訴えようとしているのかについても論述した。『ミューズの響き』の殺人物語は、殺人が繰り返される「今」の時代、新しい時代を求めていながらも絶望と虚無感に支配される危機的状況への警告と読むことができる。そして、革命を望むもの同士でも、目指すべき方向性は異なり、人々の心は分断されており、そんな時代の人々の心をとらえたのがベンケルリートであった。民衆の心を尊重して語られてきたベンケルリートだからこそ、誰もが迷っている時代に、民衆の心に寄り添いつつ、時代の変化を受け止めた問題提起を行う事ができたのである。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>今回は、殺人や死をテーマとする詩を考察の対象としたが、他にも政治、宗教、道徳観、恋愛等のテーマから考察を行う事も可能である。今後は他のテーマも順次取り上げていくことで、ベンケルリートの役割や、三月革命期の状況についてより深く考察していきたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表
学会名
発表テーマ
年月日／場所

研究成果物
テーマ
誌名
巻・号
発行年月日
発行所・者</td><td>研究成果物
三月革命期におけるベンケルリートの変容―『ドイツの手回しオルガンのミューズの響き』の殺人と死―『リュンコイス』第 56 号、61～78 頁、桜門ドイツ文学会、2023 年 3 月発行</td></tr>
</table>